

令和三年度 一般入学試験問題 「国語」

【試験上の注意答へはすべて解答用紙に記入すること】

□ 次の文章を読んであとの問いに答えよ。

わたしってだれ？

じぶんってなに？

だれもがそういう爆弾のような問いを抱えている。爆弾のような、といったのは、この問いに囚われると、いままでせっかく積み上げ、塗り固めてきたことがみな、がらがら崩れだしそうな気がするからだ。A 崩れるとまではいかないにしても、なにか二度と埋められないひびや（a）亀裂が入ってしまいそうな気がするからだ。この問いには、問う者じしんを I ところがある。

だれもが、人生のなかで何度も何度もこの問いを口にする。あるいは、（1）ひとりごちる。あるいは、そのような問いの切迫を、それと意識することなく感じている。そして、そのように問うことじたいが、どうやらこの問いのうちに（b）潜んでいる不安をあおりたてることになっているらしいことも、うすうすは気がついている。

〈わたし〉への a。それはふつう、わたしに固有なもの、つまり他人になくてわたしにだけあるようなものはなにかと問いかけるものだ。そのように問うじぶんに対して、である。そしてじぶんのなかを探りだす。

ほかのだれでもないこのわたしってだれ？ じぶんってなに？ このじぶんにしかないものってなんだろう？

（2）でも、この問い、どこか立てかたがまちがっているということはないだろうか……。

じぶんがだれかをたずねて、じぶんのなかを探す。こころやからだの能力だとか、社会的な地位だとか、性格や容貌だとか。でも、これ、ほんとうに II 問いかたなのだろうか。〈じぶん〉の存在というのは、ほんとうは、もつと別のかたちで問うべきものではないのだろうか。

〈じぶん〉。この〈じぶん〉っていったいなんだろうと思うことが、だれにもある。なんだかんだ言ったって、結局はたったひとりしかないこのじぶん。知らないあいだにもう存在してしまっていて、生まれなかつたらよかつたのにも思ってももう手遅れのじぶん。そしていつか、死ぬときがきたら消えてなくなってしまうらしいこのじぶん。いやそんな瞬間の III だったらまだいい。いつか知らないうちにじぶんということを意識することもなくなっていく、意識することがなくなつたということも意識できずに、いつのまにか消えてなくなっているという、そういう（c）緩慢な死が、じぶんというものにもいつかくると予感している。そしてついにはだれの記憶からも消えてしまい、存在したかしかつ

令和三年度 一般入学試験問題 「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

たかすらもはやさだかではなく、いやそもそもそれが問題とすらならなくなってしまおうというようなきが。

いつの日かさだかではないが、幼いときのある日に、他のだれでもないこのじぶんというものを感じ、意識しはじめた。そしていったんそういうじぶんというものを意識しだすと、そのように意識していないときでもじぶんはいる、ということがあたりまえのようになりだす。たとえば眠っているあいだは「じぶん」という意識はないのに、そして眠る前のじぶんと、めざめた後のじぶんとが、同じじぶんであるという証拠が **IV** あるわけでもないのに、眠りの前後でじぶんは同じこのじぶんだという意識を捨てない。あるいは、眠っているあいだにじぶんでもどうしてそんな夢を見たのか、理由が思いつかないにもかかわらず、じぶんのなかにはなにか別の生きものがいるなどとは考えずに、じぶんのなかにその理由を求めはじめた。

でも、じぶんっていったいなんなんだろうと考えはじめると、〈じぶん〉というもののこういう見かけ上の (d) 堅固さも、とたんにぐらぐら揺らぎだす。〈じぶん〉という存在には、どこをとっても不確かな根拠しかないという事実が、つきつきとむきだしになってくる。

B、こんな問いにふととりつかれてしまふときって、どのようなときだろう。理由はじぶんでもよくはわからない。そしてとくになにか不満があるというわけでもない。なのにそういう問いが、わたしをとらえて放さない。

「じぶん探し」をしているのだな、と言うひとがいる。そう言われると、なるほどそうなのかもしれないとも思う。 **C**、(3) むかしからよく言われてきたように、「ほんとうのじぶん」「本来の自分」を求めているのだと言われると、ちよつと抵抗を感じないでもない。そして、わたしはほんとうにじぶんになりたがっているのか、それとも逆に、ほんとうはじぶんでなくなりたく思っているのか、じぶんでもよくわからないというのが、どうもほんとうのところではないかという気がしてくる。

「じぶんらしく」になりたい、じぶんとはいったいどういう存在なのかを **V** したいと思つて、じぶんのなかを探す。

顔がいい？ 走りが速い？ 計算が速くて正確？ 明るい？ こまやかな心づかいができる？ おしやれ？

どれをとつてもわたしだけに **B** のものってありはしない。このような性質や能力はだれもが多かれ少なかれもっているものだ。性別や年齢や国籍などというのは、それこそみんながもっている。だから、その一つ一つはだれもがもっているものであるにしても、それらの組み合わせにひとりひとり独自のものがあるのだ、というのは、そのときだれもが思いつく論理である。が、これがじぶんというものの、かけがえのない (4) 不二の存在を証しているなどというには、あまりにも貧弱な論理であるのは、だれもが直感的に気づいている。

令和三年度 一般入学試験問題 「国語」

【試験上の注意 答えはすべて解答用紙に記入すること】

じぶんのからだ、などかんとんに言うけれど、よく考えてみるがいい。わたしたちはじぶんのからだについて、ごくわずかなことしか知らない。背中やお尻の穴をじかに見たことがない。いや、他人がわたしをわたしとして認め、覚えてくれるその顔を、よりによって当人であるこのわたしは一生見ることができない。鏡や写真であとで確認することはできる。が、わたしが他人に向きあっているときのまさにその顔（わたしそのもの）を、わたしは見るができない。わたしをつくっているこの身体の内側となると、これはもうぜんぜんじぶんではわからない。どうも故障しているらしい、と感じても、そこでなにが起こっているのか、じぶんではわからない。これ、ほんとに「じぶんの」からだ？ そう問いたくなるほどに、このからだはわたしから遠くへだてられている。からだのことを考えると、ニーチエが引いていたドイツの格言、「各人にとってはじぶんじしんがもつとも **VI** ものである」ということばがとてもしアルな表現に思えてくる。

そもそも、わたしが自意識というものをもってから死に絶えるまで、わたしのからだはわたしのものでありつづけるかという、これがあやしいものだ。いちばん典型的なのは病気になる時。頭が痛い、くしゃみが出る、腫れ物ができる、出血する……じぶんのからだだがそんな状態になったとき、わたしたちはすぐに医師のもとに走り、聴診器を当てられ、とんとんと背中を叩かれ、そして血や尿の検査を受ける。ときにはレントゲンやCTの器械を使って検査してもらおう。医師の顔をじつと食い入るように見つめる。 **D**、結果をきいてはつと欲び、あるいはうちひしがれる……。

じぶんのからだがいまどういふ状態にあるのか、それがじぶんではよくわからない。じぶんのからだへの回路に医師という他人が（e）介在しているわけだ。この意味でも、わたしのからだはわたしのものであるとは、そうかんとんには言えそうもない。 (5) (じつ)のところ、わたしの身体はどこにいったいプライベート（私的）と呼びうる領域があるだろうか。

（出典：鷲田清一『じぶん・この不思議な存在』講談社現代新書・一九九六）

問一 空欄 **A**、**D** を補うのに最も適当な語を、次の（ア）～（オ）の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

（ア）それにしても （イ）そして （ウ）けれども （エ）あるいは （オ）すなわち

問二 波線部（a）～（e）の語の読みを記せ。

令和三年度 一般入学試験問題 「国語」

【試験上の注意 答えはすべて解答用紙に記入すること】

問三 空欄 I 〽 VI に入れるのに最も適当な語を、次の (ア) 〽 (エ) の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

空欄 I (ア) あやうくする (イ) 覚束なくする (ウ) 心細くする

(エ) 深刻にする

空欄 II (ア) 正確な (イ) 正しい (ウ) 深い (エ) 真面目な

空欄 III (ア) じぶん (イ) 存在 (ウ) 意識 (エ) 死

空欄 IV (ア) まざまざと (イ) ありありと (ウ) はつきりと

(エ) きつぱりと

空欄 V (ア) 確認 (イ) 認識 (ウ) 論証 (エ) 探求

空欄 VI (ア) 不明な (イ) 近い (ウ) 遠い (エ) 不思議な

問四 傍線部 (1) 「ひとりごちる」、(4) 「不二の」の意味として相応しいものを、次の (ア) 〽 (エ) の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

傍線部 (1) (ア) ひとりで行動する (イ) ひとりで愚痴を言う (ウ) ひとりで悩む

(エ) ひとり言を言う

傍線部 (4) (ア) ふたつとない (イ) ユニークな (ウ) 独自性を持つ

(エ) 癖がある

問五 傍線部 (2) 「でも、この問い、どこか立てかたがまちがっているということはないだろうか…」とあるが、それはなぜか。簡潔に説明せよ。

問六 空欄 α β に入る言葉を、それぞれ本文中から抜き出せ。

問七 傍線部 (3) 「むかしからよく言われてきたように、「ほんとうのじぶん」「本来の自己」を求めているのだと言われると、ちょっと抵抗を感じないでもない」とあるが、なぜ「抵抗を感じないでもない」のか。簡潔に説明せよ。

問八 傍線部 (5) 「じつのところ、わたしの身体のどこにいったいプライベート(私的)と呼ぶ領域があるだろうか」とあるが、それはどういうことか。簡潔に説明せよ。

問九 次の文章にある傍線部のカタカナ表記を、漢字に改めよ。

*主人公「わたし」は記憶を失っており、蔵利彦医師から記憶を取り戻すために、自分で人格を作り出し、演じるという治療をすることを説明される。出題に使用した漢字が別の箇所で使用されている際は、カタカナで記している。

令和三年度 一般入学試験問題 「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

「そういうものですか」

「そうそう、それより大事なものは、どんなふうな雰囲気の人なのか、ということですよ。出身地や趣味などよりも、丹羽ハルカのかもし出す感じを、最初に決めるべきですね。人は、そういうものから、自然にその人物の性格や背景を想像するものですからね」

せっかくわたしが「丹羽ハルカ」の出身地と趣味を決めたのに、蔵利彦は言う。少しだけ、がっかりする。

「今、しょんぼりした気分になりましたね。なるほど、丹羽ハルカは案外ものごとを気に病む。①ナイコウ的なのかな」

「なんだか、②ユウドウしてます？」

「いやいや、それじゃあ治療にならない。決めつけすぎましたね、ぼくが」

蔵利彦が言うように、丹羽ハルカはナイコウ的なのだろうか。じっと考えてみる。わからなかった。まっさらな紙に、何かの③リンカクを少しだけ描きはじめたような気分である。けれど、ひと筆でも描いてみると、これから描こうとしているものの向かう先が、わずかではあるけれど感じられてきそうな、そんな予感はあるのだった。

「丹羽ハルカは、けっこう適当なタイプな気がします」

「適当。うん、なるほど。④ジユウナンなんだね」

「よくいえば、まあ」

少し、楽しくなってくる。会ってからずっとにこやかで⑤キゲン^⑤のいい蔵利彦には、ほんとうのところ時々むっとさせられていたのだけれど、適当、という丹羽ハルカの特徴がはつきりしてきた今、わたしのキゲンもいくらか上向きになりつつあった。

「あなたは、転校生です。高校二年の一学期の途中から転校してきた女性。どうぞ、あなたの役を楽しんでください」

そうだ。わたしはこれから、役を演じるのだ。丹羽ハルカという役。役を演じるからこそが、わたしの治療なのだそうだ。